

129 パリ万博と日本（その1）（2022年9月22日）

明治時代（1868-1912）になって近代化を進める日本は、欧米各国で開催された万国博覧会に参加して、日本の美術工芸品を積極的に売り込みました。日本が、19世紀後半から20世紀前半にかけてパリで開催された万博に参加した足跡を示すものをいくつか見つけたので、2回に分けてご紹介をします。

日本が、パリで開催された万博に初めて参加したのは、1867年に開催された2回目の万博です。フランス政府からの参加要請に応じて、1865年に幕府は万博への参加を決定しました。そして、幕府は、国内の諸藩や商人にも参加を呼びかけ、薩摩藩、佐賀藩と江戸の商人が幕府に対して参加表明をしました。幕府は、日本としての展示を想定して、レオン・ロッシュ第二代駐日全権公使を通じて万博参加に向けた調整を行っていました。しかし、薩摩藩は、単独で出品することを決め、モンブラン伯爵を通じて独自の展示場を確保しました。幕府は、薩摩藩が、日本国と同等の立場で出品することに抗議したため、薩摩藩は、幕府と別の展示場を使用するものの、薩摩の旗を取り下げて日の丸を掲げることに了承しました。しかし、幕府側は「政府」の仏訳である *le gouvernement* の意味を十分に理解せず、幕府は「Gouvernement du Taicoun（日本大君政府）」、薩摩藩は「Gouvernement du Taichiou de Satsouma（薩摩太守政府）」と名乗ることを認めました。そして、翌日のフランスの新聞では、「日本はプロイセンのような連邦国である」と報道され、幕府と薩摩藩の関係が悪化したという事件がありました。ディジョン美術館は、薩摩藩が出品した皿や香炉を所蔵しています（写真右）。



1867年の万博では、日本の内部で混乱はあったものの、日本美術が高い関心を持って受け入れられました。1878年に開催された3回目のパリ万博は、ジャポニスムブームが高まった時期と重なり、出品された日本の美術品が盛んに取引されました。パリ装飾芸術美術館では、1878年



パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

の万博時に購入された漆塗見本額（写真上）、衝立や九谷焼の大皿を見ることができます。この額は、日本の工芸技術の高さを示すものとして使われました。

1878年の万博時には、セーブル焼の一对の壺と69件の日本の陶磁器との交換が行われました。セーブルの壺は、東京国立博物館が所蔵しています（写真右）。一方、日本の陶磁器の一部は、セーブル国立陶磁器美術館が所蔵しています。フランス側に引き渡されたものには、瀬戸の茶入や伊賀の花入（写真下）があります。これらは地味な茶道具で、輸出向けの華やかな柄のものとは趣が異なります。69件には、野々村仁清や尾



形乾山と
いった有
名作家の
作品もあ
りました。一对の壺と69の作品はアンバランスですが、当時の日本人がセーブル焼に憧れを抱き、何とかしてセーブル焼を手に入れたかったという強い思いが伝わってきます。



Paire de jarres à motifs classiques en émaux polychromes sur glaçure et or sur fond bleu
Manufacture royale de Sèvres, 1876
Tokyo National Museum
「瑠璃地金彩人物図壺」
セーブル国立陶磁製作所 1876年
東京国立博物館蔵

出典：ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>)

注：美術館の展示は、変更されている可能性があります。